諏訪小だより

令和３年４月３０日
５月号
多摩市立諏訪小学校
校長　齋藤　幸之介

学校で目指したい「学び」－今の時期にこそ大切にしたいこと

令和３年度が始まって１ヶ月が経とうとしています。コロナ禍でどうしても制約がかかる日々の学校生活においても、子供たちは楽しさを見出しながら活動をしようとしています。自ら友達や環境に働きかけようとする姿からは「たくましさ」を感じることも少なくありません。子供たちの可能性の素晴らしさを見取ることができます。

さて、４月には１・２年生が交通公園にて交通安全教室を行いました。例年に比べると少なくはなりますが、今後も可能性を適切に判断しながら学校行事を行いたいと思います。

運動会を始めとする大きな学校行事は、１０月以降の後期に設定している場合が多い、と言えましょう。ですから、今は、教科等の学習を一層充実させる時期とも言えます。新しい学年の授業にも少しずつ慣れてきましたから、前期には、保護者会でもお話をさせていただいた「確かな学力」を身に付けるための取組に焦点を当てていくべきと考えています。

「新しい学び」とは

私共が平素学習活動を進めるガイドラインとしているものが「学習指導要領」です。およそ１０年ごとに改訂されていますが、現在私共が用いている学習指導要領には、「予測困難な時代」において、子供たち一人一人が「持続可能な社会の担い手となる」ための資質や能力を身に付ける必要性が述べられています。

また、今年１月に文部科学省に設置されている中央教育審議会は、新しい教育のあり方を「令和の日本型学校教育」として述べています。我が国が今まで行ってきたよさを踏まえながら、「一人一人に応じた学び（個別最適な学び）」と「子供同士や多様な他者と関わりながら行う学び（協働的な学び）」とを一つの視点として教育活動のさらなる充実を図ろうということです。ときに一人一人の特性に応じた活動を展開しながら、また、ときに相互に関わりながら、個々の資質や能力のさらなる向上を図る大切さを、私共も確認をしたところです。

「新しい学び」を進める上で－単に知識や技能を身に付けるに止まらず

先日お話をしましたが、子供たちは、「基礎的・基本的な知識や技能」を身に付けることが大切です。漢字の習得などが最も分かりやすい例なのかもしれません。私共が子供の頃は学習がここで止まっていた、と言っても過言ではありません。しかし、これでは「予測困難な時代」に生きていく力にはなりにくいのです。では、どうするか？身に付けた知識や技能は、一つの「道具」として新しい「課題」を解決するために活用されるようにします。

例えば、社会科で「分別されたゴミはそれぞれに合った方法で処理される」という「知識」を得たら、実生活でこのことを活かしていくことが大切です。さらに、ゴミ処理の現状を踏まえながら、例えば、昨今特に重視されている「海洋プラスチックゴミ」の環境に及ぼす影響を自ら追究することにより、「新しい環境問題」を自身の課題として受け止めながら自分なりに取り組んでいくことが可能です。このことは、多摩市教育委員会が重点を置く「持続可能な開発目標（SDGｓ）」にも合致した学習活動にもなるのです。

「問題解決活動」－「新しい学び」を進める上で大切にしたいこと

以上のような学習は、「問題解決活動」などとも言われます。知識や技能を「教え込まれる」のとは異なり、「自ら問題や課題をつかみ、これを自分なりに解決する」という過程を重視します。いくつかの授業を参観したところ、例えば、国語科では文学作品を読んで最初に得た感想や疑問を発表しながら課題を設定し、個人で解決したりこれを基にグループや学級全体で話し合ったりしながら解決し、作者の思いや話の面白さを深めていく、という場面に出会いました。本校でも、確実に「問題解決活動」は進められています。

「問題解決活動」は難しい、だからこそ

「問題解決活動」を自ら進めることはとても難しい、とも言われています。うまく解けない、という経験を経ながら、少しずつ力が身に付くとされます。だからこそ、このことに、子供たちも教職員も「粘り強く」取り組んでいくことが肝要かと思いますが、皆様はいかがお考えになるでしょうか。

今後の成果や具体的な取り組み方を中心に、機会を改めてお伝えできればと思っています。その際にはどうぞお付き合いくださいませ。